

The Report on the Village in East China (15): Jiangsu Province in December 2019.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Bennou, Saiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061727

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



華東農村訪問調査報告(15)

—— 2019年12月，江蘇省無錫市の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、2007年から参加した共同研究による華北農村訪問調査¹⁾と並行して、2008年3月より10年余りにわたってほぼ毎年1回、華東地域の農村を訪問して聞き取り調査を行ってきた²⁾。今回、2019年12月20日から25日までの約1週間、筆者は上海を經由して無錫の農村を訪問して話を聞くことができた。今回の旅程は、以下のとおりである。

12月19日(木)、金沢から新幹線などを利用して成田まで移動し、成田空港近くのホテルに前泊し、翌20日(金)に成田空港 (NH919, 9:30) から出国して上海浦東空港 (12:00) へ到着し、すぐに無錫へ移動した。21日(土)は、湯可可に案内していただき、無錫市内を參觀した。

22日(日)、錢江の自家用車に乗って8:30にホテルを出発し、9:30頃に馬山街道万豊村の踏青農庄に到着すると、杭建華 (江陰技術學院教員) と「馬山旅遊假区管理委員会委員」(?) の宋 (政治協商委員会から派遣) が出迎えてくれた。しばらくして、高来東と薛華も合流した。踏青農庄の老人に話を聞いた。

23日(月)、無錫 (G7225, 9:28) から上海 (10:18) へ移動し、午後は華東師範大学教授の張文明と意見交換と2020年2月29日に開催する予定になっているシンポジウム (開催地は金沢市内) について相談した。

24日(火)、上海 (G7004, 8:00) から南京 (9:39) へ行き、南京大学中華民国中心の張憲文教授と意見交換し、南京 (G7015, 14:00) から上海 (15:39) へ戻った。翌25日(水)、上海浦東空港 (NH960, 17:25) から出発して成田空港 (21:00)

へ帰国した。26日(木)、成田から上野を経由して金沢へ戻って来た。

よって、本稿では、2019年12月に訪問した江蘇省無錫市の農村における聞き取り内容と上海市・無錫市・南京市の状況などについて整理した。

なお、本稿においても、前稿までと同様に、主に煩雑さを避けるために、原則として敬称を略すとともに、算用数字と常用漢字を用いることにした。

I. 聞き取り調査

聞き取り対象者：陳建生

聞き取り日時：2019年12月22日(日) 9:55～11:50・12:45～14:00

聞き取り場所：無錫市濱湖区馬山街道万豊村踏青農庄

案内者：湯可可・銭江・高来東・薛華

連絡員：宋(氏名不詳)

聞き手：弁納才一

通訳：杭建華(馬山語から無錫語へ)・
周如軍(無錫語から日本語へ)

陳建生の個人史

- ・解放前、凶作の年に地方政府から「洋乾麵」(輸入小麦粉)が配給されたことがあった。とても美味しかった。
- ・13～14歳頃(1947～48年?)、販売目的で栽培していた「楊梅」を売却する際に、宜興県周鉄鎮から本村へ買付にやって来た「經紀人」(仲介人。無錫一帯では「地貨行」という)について行って同鎮の「赶集」(定期市)に何度も行ったことがある。とりわけ、本村のそれぞれの家が販売目的で栽培していた「楊梅」は時期によって売買価格の変動幅が大きかったので、「地貨行」が宜興県周鉄鎮の定期市における販売価格をごまかすのを監視する必要があった。だが、大人は貴重な働き手だったので、幼い子供の自分が代理で行かされた。他の家では、私より少し年上の女の子を監視役として行かせていることが多かった。「楊梅」の売却が無事に終わった後、昼に簡単なものを食べ、それ以外は特に買い物をするこ

なく、全てのお金を家まで持ち帰った。宜興県周鉄鎮では、「地貨行」が昼にちょっとした食べ物をごちそうしてくれることもあった。これに対して、小麦や稲の藁は、販売価格が一年を通してほぼ一定していたので、「楊梅」の販売の時とは違って宜興軒周鉄鎮の「地貨行」による買付に任せていた(宜興県周鉄鎮の定期市まで「地貨行」について行くことはなかった)。

- ・1953年(陳建生によれば、「ソ連のスターリンが死去した年だった」という)、上海から本村に戻ってきて農作業に従事した。その時は、まだ結婚していなかったもので、両親の家族の一員として互助組に参加した。
- ・1955年、宋泉娣と結婚した。妻は、行政村である軍豊村(万豊村の誤りか)の中の自然村である新城村の出身で、41歳で死去した(死因は不詳)。
- ・1955年、桃内初級合作社に参加したが、その後、1年も経たないうちに万豊高級合作社が成立した。
- ・1958年に成立した馬山人民公社内の万豊生産大隊の下には桃花・内閭・銭家の3つの生産小隊があった。このうち、桃花生産小隊は王姓の家が多く(薛華の実家が参加)、内閭生産小隊は陳姓が多く(陳建生が参加)、銭家生産小隊は銭姓が多かった。また、それぞれの生産小隊には象徴(シンボル)のようなものがあった。すなわち、桃花生産小隊は「黒」、内閭生産小隊は「銭」、銭家生産小隊は「黄」だった。

陳建生の家族史

- ・父(陳志泉、未年生まれ)は、1979年に85歳で亡くなった。解放前、1畝の所有地の他に、13~14畝の土地を借りて農業経営を行っていた。水稻・小麦・山芋などを栽培し、「楊梅」などの果樹も栽培していた。収穫した米の3~4割は小作料として地主に納めていた。主食は、米や小麦粉で足りない時は山芋を食べた。水稻作のほとんど大部分はジャポニカ種米だったが、インディカ種米も少しは植え、もち米も0.8~1畝ほど作付けていた。もち米は、自家消費用として粽(ちまき)・年糕(年越しの時に食べる餅)・団子などの原料となった他に、発酵酒の「米酒」(黄酒)の原料にもなった。父も「米酒」を飲んでいて。
- ・稲藁は、木の枝を薪(焚き木)の補助として煮炊きの時に使った。麦稈

と松の木の枝は、宜興県周鉄鎮からやって来た「地貨行」に薪として売った。また、果樹の「楊梅」も、宜興県周鉄鎮からやって来た「地貨行」が買い付けに来ていたが、売上げ価格の10%を「地貨行」が手数料として受け取り、残りの90%を農家が現金で得ていた。

- ・父（陳志泉）は、3人の兄と1人の弟の5人兄弟で、みな農作業と果樹栽培に従事していた。一番上の兄の名前は覚えていないが、二番目の兄は陳志孝、三番目の兄は陳志跡（「小名」は接大）、弟は陳志周だった。
- ・母（宋氏、名前は不詳）は、父より2歳年下で（酉年生まれ）、馬山鎮和平村の出身だった。実家は農家で、兄弟は1人だけだった。和平村は本村とはとても近かったので、何度も訪ねて行ったことがある。我が家より経済状態は少し良かったように見えた。母の実家は、8～10畝の農地を所有し（米で納税していたが、凶作時には銭納だった）、輸送用の船も所有していた。しかも、和平村では、船を所有する農家が4～5戸いた。その船で宜興県周鉄鎮へ行き、定期市で子豚を買って持ち帰り、養豚した後、「小刀手」（屠殺業者）に捌いてもらってから、豚肉を「肉墩頭」（市場）で売った。その「肉墩頭」は、解放後は「食品站」と呼ばれるようになった。宜興県周鉄鎮の子豚を売買する定期市は、「猪落」と呼ばれていた。春節の時には、近隣の3軒で豚1匹を分け合って食べた。すなわち、ご近所さんへお裾分けをしたということであろう。
- ・私（陳建生）は4人兄弟の末っ子で、我が家は貧しかったために、我々兄弟はみな学校には通ったことがなかった。
- ・一番上の兄（陳亢生、午年生まれ）は、私より10歳くらい年上だった。「表妹」（母の妹）が上海市に住んでいたため、その関係を頼って上海市に働きに行くことになり、その知人の紹介によって上海鴻光印刷所で働くようになった。後に、同印刷所の「経理」になった。1937年に抗日戦争が勃発すると、上海市全体が不安定になり、同印刷所も営業を停止したために、夫婦ともども上海から馬山に避難してきた。抗日戦争勝利後、上海市の同印刷所に戻ってくるように頼まれたが、妻（魯姓、馬山の西村の出身）が上海に行くことに強く反対したので、本村に留まった。妻が反対した理由は、日中全面戦争が勃発すると、上海市から無錫市に戻る

鉄道が日本軍によって爆撃されて利用することができなくなり、兄夫婦が上海市から無錫市馬山鎮へ徒歩で避難してくる途中で、日本軍の爆撃に遭遇し、道路の側溝に身を隠してどうにか難を逃れたという恐怖体験があったからであるという。こうして、一番上の兄は、抗日戦争勝利後は国民党政府下で「保長」を務めた。だが、解放後とりわけ文化大革命時期になると、国民党政府時期に「保長」を務めていたことを理由にして批判された。また、父の弟（陳志周）といっしょに農作業に従事し、「記帳」（生産隊で会計の仕事？）もやっていた。

- ・上から二番目の兄（陳興生、子年生まれ）は、本村でずっと農業に従事し、互助組・初級合作社・高級合作社・人民公社に参加し、10年前（2009年）に86歳で亡くなった。その妻（秦姓、名前は不詳）は本村から10里未満の耿湾村の出身だった。秦氏は秦王朝の末裔で、近代の無錫でも秦邦憲などの有名人がいる（他にも数人の名前が挙げられていた）。
- ・上から三番目の兄（陳春生）³⁾は、5年前（2014年）に85歳で亡くなった。
- ・私の兄弟はみな長寿だった。すなわち、上から二番目の兄（陳興生）は86歳まで生き、上から三番目の兄（陳春生）は85歳まで生きた。そして、今年（2019年）、私（陳建生）は86歳になった。なお、父（陳志泉）は85歳まで生きた。

宜興県周鉄鎮

- ・宜興県は陶器造りが盛んで、そのために柴や麦稈を大量に燃やす必要があった。万豊村からも柴（松の木の枝）や麦稈を買い付けていた。
- ・解放前、宜興県周鉄鎮では、旧暦の3日・9日・13日・19日・23日・29日に「赶集」が開かれていた。

万豊村

- ・解放前、本村には30戸余りの農家があった。当時は、ほとんど全ての家で「楊梅」を栽培し、宜興県周鉄鎮からやって来た「地貨行」に販売していた。
- ・太湖における漁業⁴⁾は、浅瀬が多く、座礁するなどの危険も多かったので、本村人はやろうとしなかった。よって、漁業はほとんど「外地人」

が従事した。無錫市の太湖周辺地域では、太湖の湖上生活者（「蛋民」）のことを「捉魚佬」と呼んでいた。

- ・本村は、1949年に解放された。なお、本農庄（踏青農庄）の経営は、2000年から始まった。同農庄の経営には陳建生の兄（上から二番目の兄である陳興生か上から三番目の兄である陳春生）も関わっていたという。

II. 訪問地

(1) 無錫市－12月20日(金)・21日(土)・22日(日)・23日(月)

12月20日(金)、成田空港から上海浦東空港に到着した後、上海浦東空港でタクシーに乗り込んで上海駅の地下タクシー降車場で下車して、そこから徒歩で上海駅に隣接する上海駅「售票庁」（切符売り場）まで移動し、当日20日の上海から無錫への切符、23日の無錫から上海への切符、24日の上海・南京の往復切符を全て購入することができた。しかも、今回は、こちらから要求したわけではないが、初めて領収書をもらうことができた。こうして、上海駅から無錫駅へ高速鉄道で移動し、無錫駅からタクシーに乗り込んでホテルに行くことができた。だが、筆者が宿泊することになっていたホテルまでの距離が短かったので、タクシーの運転手（無錫語は理解できるが、無錫人ではなかった）は明らかに不満げな様子だった。

同日の無錫市は曇り空で、やや寒かった。ところが、今回は、宿泊した無錫君樂酒店（四つ星ホテル）のレベルは数年前に宿泊した時に比べると、明らかに低下していたように思われた。例えば、室内の卓上電気スタンドは故障して灯りがつかなかったし、室内の暖房はほとんど効いていなかった（宿泊客からクレームが寄せられたのであろうか、翌21日の朝には暖房が効いていた）。また、湯沸かしポットは汚れていた上に、バスタオルも端が擦り切れていた（翌21日は新品のタオルが置かれていた）。ただし、22階建ての18階の部屋だったので、見晴らしは良かった。しかも、宿泊客が少なかったためであろうか、周辺は非常に静かだった。室内に設置されていた机の上には、「開展掃黑除惡專項鬭爭，創造安全穩定社會環境」（崇安寺派出所）と書かれた三角形に折られた（三つ折りにされた）厚紙が置かれていた。

20日18:00から2時間ほどにわたって、湯可可とホテルの近くにある複合ビル(1階には新たに日系コンビニのファミリーマート「全家便利店」が開店していた)の中にある江南料理のレストラン(同店内はほぼ満席状態だった)で夕食を食べながら、翌21日及び22日の行動計画と2年後に東洋文庫で我々が開催を予定している国際シンポジウム(筆者が研究代表者の科研費(基盤研究B)と田中比呂志が研究代表者の科研費(基盤研究B)による合同開催)に関する全体テーマや無錫側からの参加者・報告者などについて簡単な打合せを行った。

21日(土)も、早朝から降雨で、天候が不順だったことから、湯可可の提案に従ってホテル内で休息することも考えたが、10:00にホテルのロビーで湯可可と待ち合わせてホテルを出発し、徒歩でとりあえず無錫市内で最も大きな新華書店(ホテルから簡単に徒歩で行くことが可能な距離)に行くことにした。そこへ行く途中で、雲蓮園(写真1を参照)を見つけた。

そこは、楊味雲の邸宅内の庭園だった。彼の伯父の楊宗濂と楊宗瀚が李鴻章の幕僚を務め、中国国内で最初の民営企業である紡織工場(無錫業動機器紡織公司)を創設した。そして、1905年に楊味雲が洋風の「小白楼」を建てたが、中国様式と西洋様式の融合的な庭園が雲蓮園だった。



写真1. 雲蓮園

なお、湯可可によれば、楊味雲の息子が中華民国時期に上海に移り住んだが、解放後は台湾に移住し(同邸宅は没収された)、1970年代末の「改革開放」以降、無錫市に投資して経済発展に貢献したために、かつて同邸宅内の庭園だった場所に関する権利を回復したが、無錫には帰ってきてはいないという。

さらに、清末の資本家として著名な薛福成の邸宅だった薛家花園(写真2を参照)の側を通過した。今回は、天候も悪く、時間的な制約もあったので、今回は、雲邁園や薛家花園などを参観したい。なお、湯可可によれば、今回は、著名な小説家だった銭鐘書(代表作は「圍城」)の「故居」(旧居)も案内したいという。

21日午後は、新西飯店の1階にある喫茶店の個室(貸し切り)で湯可可に無錫太湖学院博士の李素潔を紹介していただいて、中国伝統文化(唐詩)などについて話を聞いた。また、同氏は河北省唐山市内の農村に生まれたということから、その農村の様子についても少し話を聞いた。

筆者の問題関心から、当該地域がかつて棉作地で、「粗布」(手織り綿布の土布)も作られていたという点などを確認した。出身地の農村を案内してもよいと言われたことから、湯可可が紹介してくれた理由の一端を理解することができた。



写真2. 薛家花園

22日(日)、7:30頃にホテルのレストランに朝食を食べに行くと、宿泊客でやや混んでいた。ただし、ホテルの朝食で提供された果物の中の西瓜はほとんど味が無かった。当日は天気が悪くなく、終日、小雨だった。8:30にホテルを出発し、踏青農庄を訪問した。同農庄にとっては明らかにオフ・シーズンであり、当日は同農庄を訪れている人は1人もいなかった(聞き取り対象者の息子もいなかった)。昼食は、同農庄内の個室レストランでごちそうになった。ただし、室内に暖房設備はなく、寒かったが、我々のためだけに、魚料理が3皿も出されたことから、かなり配慮されていたことがわかる。

同日午後、踏青農庄を離れた後、引き続き、銭江・高来東らに馬山鎮の「楽山市場」(写真3を参照)を案内していただいた。様々な新鮮な食材とりわけ太湖産と思われる魚介類が非常に豊富だった。銭江には露店で売っていた「萝卜餅」(細切り大根に小麦粉を付けて油で揚げたもので、1個1元)をごちそうになった。素朴な味で、おいしかった。銭江が子供の頃はよく食べたという。その露天商は、安徽省からやって来た夫婦と息子の3人で経営していた。



写真3. 乐山市場入り口の門

同日の夕飯は、湯可可に新西飯店のレストランでごちそうになった。同レストラン内は全面禁煙だったにもかかわらず、隣のテーブルでは煙草を吸っている客が店員に注意されていた。

23日(月)、無錫から上海へ移動することになっていたために、営業開始時間の7:00頃にホテルのレストランに朝食を食べに行くと、前日とは異なり、朝食を食べている人は少なかった。

(2) 上海市－12月23日(月)・24日(火)・25日(水)

12月20日(金)、成田空港では、搭乗客がそれほど多くなかったために、予定よりも早く離陸するのではないかと思われたが、同空港における飛行機の離陸の順番待ちによって出発が予定より30分余り遅れた。そのために、上海浦東空港への到着時間(12:00到着予定)もやや遅れた。上海市では雨が降っていた。機内への預け荷物を受け取った後の最終の荷物検査では、スーツケースのみの検査が行われていた。13:10頃に同飛行場からタクシーに乗り、途中、やや渋滞もあって、14:30頃に上海駅に到着し、すぐに切符売り場に行ってみると、切符を購入しようとする人は少なかった。無錫駅行き的高速鉄道(中国語の略称である「高鉄」のローマ字表記であるGAOTIEの頭文字の「G」)の切符は、14:00～16:00に出発する切符は全くなく、16:00以降に出発する切符しかなく、しかも、「無座」(立ち席)しかないと言われた(筆者は、高速鉄道の「無座」の乗車は初体験だった)。車内は非常に混んでいた。上海駅構内に入る際に、セキュリティ・チェックと荷物検査で切符と「身分証」(外国人はパスポート)をチェックするが、中国人は「身分証」のみを用いて機械による検査のみで済むが、我々外国人の検査はパスポートでは検査機械のゲートを通することが出来ず、駅員がいるゲートから入ることになった。待合室からプラット・ホームに行く際の「検票」(切符検査)でも、中国人は「身分証」でスキャンして入ることができた。また、車両内での「検票」でも中国人のほとんどは「身分証」で済ませていた。中国とりわけ上海では、人員削減とチケットレス化が急速に進行していることを実感した。

なお、今回、成田空港でも、人件費の削減のためであろうか、チェックインの手続きをする際には、かなり機械化(無人化)が進んでいた。筆者も含

めて戸惑う利用客も多く、従来に比べて時間を要した。

23日(月)、無錫から上海に戻り、14:30頃にホテルからタクシー(タクシー運転手は空港行きの乗客を数時間も待っていたという)に乗って15:30頃に華東師範大学中山北路キャンパスへ同大学教授の張文明の研究室を訪ねた。張文明は、午前中に同大学の閔行区校舎で授業を行った後で、中山北路の校舎へ移動してきた。同研究室内で2020年2月29日に金沢大学環日本海環境研究センターが開催を予定している国際シンポジウムと研究環境や学生指導教育状況などについて意見交換を行った。その後、同大学校舎内のレストランで夕食をとりながら、上海の経済状況について意見交換した。なお、2021年度に日本(東洋文庫)において開催を予定している中国農村社会に関する国際シンポジウムについても意見交換を行った。一方、今回も、張文明からは、中国とりわけ上海が不景気であると聞かされた。張文明によれば、中国でもサーモンはノルウェイから輸入されているが、近年、気温が低い中国青海省でサーモンを養殖しているという。夕食後、同大学の正門前でタクシーを拾うことができた。

24日(火)、南京から上海に戻り、ホテルの近く(瑞金一路)で買い物をしている途中で、猫カフェの店舗を見つけた(写真4を参照)。利用料金は、30分につき20元(1時間につき40元)で、また、「猫食」(キャットフード)が15元となっていた。ただし、筆者と同じように、同店内を覗き込む人は多かったが、入店している客の姿は見えなかった。

上海市街地では、以前に比べると、銀行へ来る客は非常に少なかった。よって、窓口も1箇所だけになっていた。

25日(休)昼、ホテルから上海浦東空港へタクシーで移動した。そのタクシーの運転手は、崇明島の出身で(1980年生まれの39歳)、かつては農業に従事していたが、ここ数年来、崇明島では農地が無くなってしまったという。そして、2019年現在、崇明島は「生態保護区」(花卉などの栽培地)になっているという。その運転手は、学歴がないので、あまり条件の良い仕事には就けないと嘆いていた。上海浦東空港にあまりにも早く到着したために、搭乗手続きをすることができず、しばらく待機した後に早々とチェックインしたところ、預け荷物(スーツケース)の再検査を求められた。別室でスーツケー

スを開けさせられ、その中に詰めた荷物をひっくり返されたが、何も問題はなかった。それは、検査員の暇つぶしのために再検査されたとしか思えなかった。

上海市のタクシーは、初乗り運賃が14元と新たに16元のものが登場しており、初乗り運賃が16元のタクシーは車体後部のトランクが広がっていた。



写真4. 上海市内の猫カフェ

(3) 南京市

20日(金)、上海浦東空港からタクシーで上海駅へ移動し、高速鉄道に乗車して無錫に到着した後、無錫市内のホテルで南京大学歴史学院の馬俊亜教授へ電話してみると、突然だったこともあって都合がつかず、今回は面会することができなかった。そこで、南京大学中華民国史研究中心の張憲文教授の自宅に電話し、張憲文教授のみと面会することにした。そもそも、南京からのメールは受信・閲覧することができたが、日本からは南京大学へメールを送信しても、送信できない状態にあった(南京大学のサーバーが何らかの制限をしているのだろうか)。

こうして、24日(火)、上海駅(G7004, 8:00)から南京駅(9:39)へ行き、南京駅のタクシー乗り場では乗客が長蛇の列をなしていた。そこで、地下鉄1号線を利用して南京火車站(プラットフォームでは新街口站への行き方を尋ねられた)から珠江路站へ移動した。地下鉄は以前より混雑していた。2019年12月現在、南京市の地下鉄はすでに10号線が開通していた。南京大学の正門を通過して(地下鉄の駅にある自動改札機のような装置が設置されていた)、南京大学中華民国史研究中心主任(センター長)の張憲文教授(85歳)と久しぶりに面会した(写真5を参照)。



写真5. 筆者・張憲文

南京大学「管理逸夫楼」17階にある張憲文教授の研究室の隣にある中華民国史国史研究中心事務所の廊下側の壁には、連携期限がすでに過ぎたにも関わらず、依然として「金沢大学連絡事務所」⁵⁾の看板が掛けられていた。

張憲文教授は、2020年7月4日・5日に南京大学仙林校舎で第七次中華民国史国際学術討論会を主催する予定であり、筆者も招聘されて報告することになった。同シンポジウムには国内外から100人余りの研究者が参加する予定であるという。また、731部隊に関心を持っているので、金沢へ資料調査に行きたいと考えている南京大学歴史系副研究員・中華民国史研究中心副主任の呂晶も同席し、今後、2020年7月に開催されるシンポジウムに向けていろいろと連絡を取り合うことになった(張憲文教授の実質的な「秘書」も兼ねているようだった)。

24日の昼前には、降雨の中を中華民国史研究中心副主任の呂晶に南京大学の北側の出口から出て地下鉄1号線の鼓楼站まで案内していただいた。そこから乗車して、南京市で最も大きな新華書店(地下鉄の新街口站近く)へ行った。新街口站の地下道は以前よりも拡張されており、新華書店へ向かう出口は新華書店と非常に近くなっていた。ただし、新街口站の地下街は非常に広く、新華書店へ向かう出口を見つけるのに少し戸惑ってしまうほどだった。また、新華書店もエレベーターも含めて全面的に改装されて以前とはかなり異なっていた。

地下鉄の新街口站から南京火車站へ行き、南京駅(G7015, 14:00)から上海駅(15:39)へ戻って来た。

南京市の地下鉄のカードは、以前のものとは異なっており(かつてのカードは、華夏銀行のみで扱われており、デポジットが50円で、1年間使用しないままでいると自動的に無効となっていた)、38元の「工作費」を要し、最初に50元以上を入金する必要があるという。なお、同カードは江蘇省内で利用できるが、積み増し(チャージ)は南京市内のみで可能であるという。

おわりに

今回は、無錫市・南京市・上海市ではずっと天気が良くなかったためであろうか、以前と比べて日中はやや寒かった。だが、かつて当該地域の冬は晴れて非常に乾燥して顔の皮膚が痛いくらい寒かったことからすると、やはり温暖化が進行していると感じた。また、上海・無錫・南京の各高速鉄道の駅では、今回、共通する変化が見られた。すなわち、駅構内に入る際の安全検査では、日本の空港で出国の際に行われるように、一般の中国人は「身分証」をスキャンする機械にかざしてチェックが行われていた。ただし、我々外国人の場合は、駅員がパスポートと切符を目視でチェックしていた。また、駅の待合室から改札口を通過する時も、一般の中国人は「身分証」を機械にスキャンさせるだけで済むのに対して（切符購入に際してはスマホ決済しており、チケットレス化している）、我々外国人は「人工通道」の改札口にいる駅員にパスポートと切符を見せて改札口を通過するようになっていた。一般の中国人にとっては、とても便利になっていると思われるが、その便利さと引き換えに個人情報収集されている。また、駅構内は全面禁煙となっていた。

また、今回（2019年12月）も、前回（2018年10月）に引き続き、無錫市馬山鎮の農村で再び話を聞くことができた。とりわけ、太湖をめぐる無錫と宜興の農村や鎮で様々な経済関係があったことを知ることもできたことは非常に有意義だった。ただし、数年前と比べると、やや閉塞感が漂っていたように感じた。

さらに、今回、南京大学の張憲文教授や華東師範大学の張文明教授と簡単ながらも学術交流ができたことは極めて有意義だった。ただし、今般のコロナ禍により、2020年2月29日に金沢で開催する予定だったシンポジウムに張文明教授を招聘することができなかったのは残念なことだった。

注

- 1) これまでに筆者が関わった華北農村訪問調査については、拙稿「華北農村訪問調査報告(1)－2007年12月, 山西省太原市・霍州市農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華北農村訪問調査報告(2)－2008年12月, 山西省太原市・平遥市・霍州市の農村－」(『北陸史学』第57号, 2010年7月)・同「華北農村訪問調査報告(3)－2009年12月, 山西省P県の農村－」(『日本海域研究』第42号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(4)－2010年8月, 山西省P県の農村－」(『金沢大学経済論集』第31巻第2号, 2011年3月)・同「華北農村訪問調査報告(5)－2010年12月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)・同「華北農村訪問調査報告(6)－2011年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)・同「華北農村訪問調査報告(7)－2012年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第33巻第1号, 2012年12月)・同「華北農村訪問調査報告(8)－2013年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第34巻第1号, 2013年12月)・同「華北農村訪問調査報告(9)－2014年8月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号, 2015年1月)・同「華北農村訪問調査報告(10)－2014年9月, 河北省・山東省の農村－」(『金沢大学経済論集』第35巻第2号, 2015年3月)・同「華北農村訪問調査報告(11)－2015年9月, 河北省・山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第36巻第2号, 2016年3月)・同「華北農村訪問調査報告(12)－2016年9月, 河北省・山西省の農村－」(『日本海域研究』第49号, 2018年3月)・同「華北農村訪問調査報告(13)－2017年9月, 北京市・天津市・山西省の農村－」(『日本海域研究』第50号, 2019年3月)・同「華北農村訪問調査報告(14)－2018年9月, 天津市・山西省－」(『金沢大学経済論集』第39巻第2号, 2019年3月)・同「華北農村訪問調査報告(15)－2019年9月, 山西省の農村－」(『金沢大学経済論集』第40巻第2号, 2020年3月)を参照されたい。
- 2) 華東農村調査については、拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月, 江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号, 2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月, 江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号, 2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月, 江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号, 2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年2月・3月, 江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号, 2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)－2010年12月, 江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号, 2011年12月)・同「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号, 2012年3月)・同「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月, 江蘇省の農村－」(『北陸史学』第60号, 2013年2月)・同「華東農村訪問調査報告(8)－2013年9月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第34巻第2号, 2014年3月)・同「華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号,

- 2015年1月)・同「華東農村訪問調査報告(10)－2014年12月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第36巻第1号, 2015年12月)・同「華東農村訪問調査報告(11)－2015年5月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第36巻第1号, 2015年12月)・同「消え行く華東地域の農村－江蘇省無錫県の2ヶ村を例として－」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第39号, 2017年3月)・同「華東農村訪問調査報告(12)－2017年5月, 2018年3月・5月, 台湾・上海市・江蘇省－」(『金沢大学経済論集』第39巻第1号, 2018年12月)・同「華東農村訪問調査報告(13)－2018年5月・10月, 江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第40巻第1号, 2019年12月)・同「華東農村訪問調査報告(14)－2019年3月, 浙江省嘉興市の農村－」(『金沢大学経済論集』第40巻第2号, 2020年3月)などを参照されたい。
- 3) 前掲拙稿「華東農村訪問調査報告(13)－2018年5月・10月, 江蘇省の農村－」63頁では、「陳青生」と記載していたが、今回、「陳春生」の誤りであることが判明した。
 - 4) 太湖の漁業については、高来東によれば、前回、高来東からいただいた無錫市濱湖区政協学習文史和社会法制委員会・無錫市濱湖区档案局編著・高来東主編『濱湖漁史』(鳳凰出版社, 2017年)に詳しいという。高来東は、同書の主編者であり、蘇北の高郵の出身であるという。
 - 5) 弁納才一・周如軍「中国華東地域訪問記録－2010年2月・3月－」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号, 2010年12月)197頁を参照されたい。

補記) 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(一般)2018年度～2022年度「社会主義経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」研究代表者: 弁納才一, 課題番号18H00876)による研究成果の一部である。